

### ウアツハツハ具体・3

—上前智祐—

嶋本昭三

#### ○ドアがみなちがう家をつくる

舞子の山に独力で家をつくった男がいる。彼は具体美術グループの有力なメンバーである。長い間土方や工員をしながら絵を描いていた彼はどうしても自分の家が欲しかった。そこでやっとの事で1953年100坪の土地を買った。彼が33オのときである。

それから日曜日のひまなときにこの山の整地に行った。ブルドーザーでやればアツという間に出来る仕事だが、金のない彼には一本の木の根ツ子をひきぬくだけでもまる一日かかった。(図1)そして家を建てるまでに7年もかかった。



(1) 1956年舞子の山林を買い毎日曜毎に3年かかって整地

建築するのにも十分な余裕があるはずはなかった。彼はコボチ屋に行き古い戸や窓を買って来た。そしてそれに合わせて家をつくっていった。

この間も彼は力作をずっと描きつづけていた。具体に入会し、阿部展也の企画で広井力と2人展を東京で行い、新しい絵画世界展、具体ニューヨーク展、朝日新人展などに出品した。新しい絵画世界展ではタピエが、大いに気に入って彼の作品の両脇にリオパールとクラインのそれぞれ200号をならべてうなづいた。

そして6人家族の八畳一間の生活から解放された彼は、次にその横にトタン板の大きなアトリエをつくりにかかった。師吉原治良のアトリエを模して何百号という大きな絵が入り、うしろ手の中二階から眺められるという構想の部屋であったが、母屋からは一たん外に出ねば入れないので、母屋の窓からスベリ台でアトリエにすべって入り、母屋に行くときはロープで入るのなら直接に出入りできるのでそういうことになった。

更に彼は自分の大作を入れる倉庫をつくり出した。ちょうど会社を退職した彼は退職金を出して鉄筋の倉庫を近くの土建屋にたのんだ。

人のいい彼の気質を利用した土建屋は彼の家にそって深い地下壕をほり、もうれつな値上げを要求して来た。若し雨が降って地面がやわらかくなれば家がひっくりかえる。とうとう彼は鉄筋の地下の絵の倉庫も友達に手伝ってもらって自分でこしらえることになってしまった。このことは素人がマイホームをつくった話だけではなくて、絵を寝ころんで眺められたり、倉庫の絵をかんそうさせたり換気させたりするのに、上前智祐独得の工夫があった。そして壁にくっついて入

らねばならぬ入口があったり、いろいろな変ったドアがならんでいたり、そしてとうとう彼の家の玄関は倉庫の奥になってしまって、そして完成ということになった。

○えのぐの下は見えなくても見える

具体の運動はミシェルタビエの来日によって1958年頃より世界の美術界におどり出た。そして幾多の美術誌にぎわした。とくに後半になって時流にうまくのれる連中も加わって、流行歌手が誕生するようなアッピールの仕方も出て来た。しかしぼくは、具体の本当の強さはこの逆のところより生れ、そしてそこに残るものであると信じている。身ぶりの大きい小さいはあっても根本は安易な受け方を拒否する人間と直結する何かを求めようとする精神は一致していたが、ややもすると誤解されていた。



(2) 上前智祐作(1965年作品)

上前智祐の作品は、この家づくりの仕事と同じであった。えのぐを点描きにして何度も上にかさねていく。赤いえのぐの点の上に黄色を重ねると下の色は消えてしまって、ふつうに考えれば無駄のようであるが、彼はその上に何度も何度も点描きを重ねてうった。下の色は見えなくなっているが、しかし要領よくやっつけたものとは全くちがう力でうたえてくる。彼は派手な具体の中では地味なこの仕事を20年もつづけ、そして今もなおつづけている(図2)。

彼のちょっと変った作品の中にマッチの軸を使った作品がある。感じは同じであるが、軸木の上にえのぐをつけて一本一本くっつけていった。一つの作品に使ったのが軸だけで15貫俵(約60キロ)全部使用したのであるからどれだけの手間がかかったであろうか。丁度舞子の山をケズったのと同じ手法であまりの重さにキャンバス代りにしたベニヤ板がもたず、うらに木をうちつけたのが寄木細工のようにまことに念の入った裏でもあった。この年、台風があって山の一軒家の軒下におかれていたこの巨作は、たびたび新築の壁にたたきつけられ壁にひびが入ってしまった。

彼は吉原治良に絵を見てもらいに来るときいつも100号の絵(ぼくの背の丈と同じ)をかついで電車にのって来た。あるとき駅員におこられてのせてくれず、それでもじっと電車がすくまで夜おそくまで駅でまっていた。

彼は神戸の垂水の家に移ったとき、会社の帰りに荷物を自分でかついで全部運んだ。

○具体とは“パス”である

1956年、具体の展覧会を東京の小原会館で開いたとき、その宿舎で新しい美術のことにについて大討論になってしまったことがある。師吉原治良はもともと議論ずきでなく実践型であったため、理論派のものはやめる傾向にあったので、そのときも大阪弁丸出して元永と村上と白髪と浮田、上前それにぼくだったと思う。めずらしく陰悪なムードになりかけて口論がふつうの

頂点に達したと思われる頃、上前智祐が“パス”というおナラをした。

“へ”のようなという言葉がぴったりの気のぬけたもので、皆がそれを聞いてすっかり気がぬけてしまい大笑いをした。このパスは皆大いに気に入り、禅問答ではないが具体とは何ぞや?“パス”である、という言葉がはやった。ぼくは今でもそうであると信じている。

このように不言実行は上前智祐の信条でもあり、また具体の精神でもあった。しかし上前智祐の前歴を知るとき、この売れることを拒否したきびしい精神がどうして生れたか、どうしても分らない。彼が苦しい生活の中にも絵を売れる方にかえようとしなくて 20 年も訴えつづけるのであるが、彼がわれわれの仲間に入るまでの前歴をしるなら、もっと驚き不思議の念でいっぱいになるだろう。

<関西女子学園短大助教授>

『未生』1974年3月号掲載／『孤立の道』に転載(1995年)

\*縦書き原稿を横書きに改めたため、数値表記の一部を漢数字から洋数字に改めています。